



**LOVE-SYLVIA**

**Original Story** アトリエかぐや  
[ TEAM HEARTBEAT ]

**Novelization** 渡辺真澄

**Original Illustration** M & M



## プロローグ

5

## 第1章 魔眼の少年

9

## 第2章 サッキュバスの誘惑

37

## 第3章 少女剣士シズナ

77

## 第4章 バスルームにて

115

## 第5章 シルヴィア先生の熱い身体

143

## 第6章 運命の女

173

## エピローグ

218



## プロローグ

女の子が泣いていた。しくしくとしゃくりあげるような声だ。

——ごめんね。ごめん。ア……スト様が……。

——ううん。私のせいよ。私が非力だったから。私が止められなかつたから。ごめんなさい。ごめんなさい。

魔女マントをかぶり魔法の杖<sup>つえ</sup>をもつた、十歳ぐらいのお姉さんだつた。顔をくしやくしやにゆがめて泣いている。

轟音<sup>ごうおん</sup>が響き、炎が熱風となつて噴きあがつた。お姉さんのマントが浮かびあがる。女の子の瞳が炎を映して赤く染まる。その瞳はルビーのようだつた。

炎を背にして立つているお姉さんは怯<sup>おび</sup>えてはいたものの、とても綺麗<sup>きれい</sup>だつた。炎のせいが赤く光る長い髪が、魔女マントの内側で熱風にゆれている。

僕は両親を捜すことも忘れて、お姉さんに見とれてしまつた。手のさびしさにハツと気づき、彼女から視線を外して足を踏み出す。

——僕のお父さんはどこ？　お母さんは？　どうしていないの？

見慣れたふるさとの景色は赤くゆらめき、業火<sup>ごうか</sup>につつまれている。僕の手をつないでく

れていたはずの両親は、やはりどこにもいない。

なにもなかつた。ものの見事に焼き尽くされてしまつてゐる。見えるものは炎のゆらめきだけだ。僕の家も、遊んだボールも、僕の顔を舐めてくれた子犬も、咲き誇つていた花も、なにもかも炎の中に呑みこまれた。

——ごめんなさい。ひとりぼっちにさせちゃつて、君はそんなに小さいのに、なにもかも奪つてしまつてごめんなさい。

少女があまりに激しく泣くので、僕はだんだん冷静になつてきた。これは夢だ。ここ数日、毎日のように見る夢。

もちろん僕は、よちよち歩きの幼児ではない。それに、伝い歩きがやつとのころの記憶が残つてゐるなんて物理的にありえない。

僕は眠りの淵から、ゆっくりと浮かびあがつていく。覚醒<sup>かくせい</sup>と睡眠の波間でたゆたいながら、少女にそつと話しかける。

——僕はひとりぼっちじゃないよ。シルヴィア先生<sup>が</sup>いるし、友達もいっぱいいるよ。だから泣かないで。僕はだいじょうぶだから。

少女は僕に向かつて手を差し伸べた。僕も手を伸ばしたが、指先が触れあう直前で離れてしまう。目覚めの時が近いのだ。僕の体はどんどん上へとひっぱられ、少女の姿が加速度的に小さくなつていく。消えてしまつ寸前、お姉さんは決然とした表情で言つた。

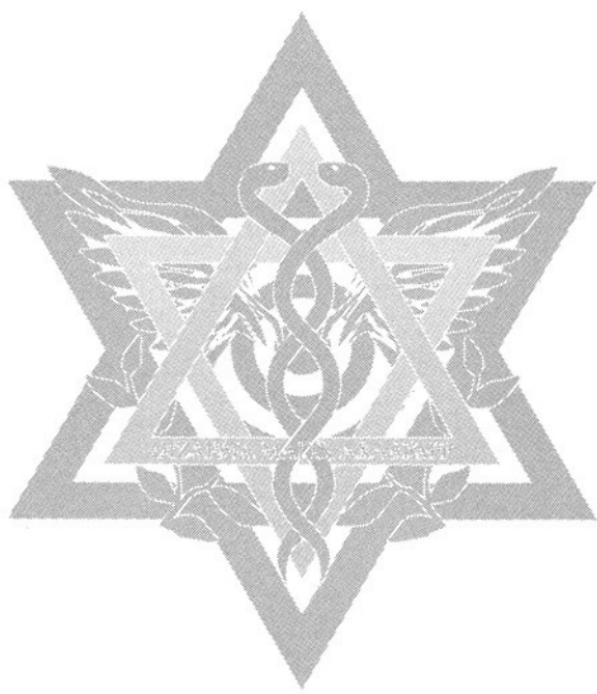
——私、必ず君を捜すから。君をぜつたいにひとりぼっちにはしないから！　だから待つててつ。私を待つててつ。誘惑に負けないで、お願ひだからつ。

ルビーの瞳が必死な色をたたえて僕を見つめる。

——うん。待つよ。僕。お姉さんを待つよ。

僕の声はお姉さんに届いたのだろうか。お姉さんは点のように小さくなり、炎のゆらめきの中に消えていった。

両目の奥が熱い。痒くて熱くてたまらない。僕は手の甲こうで目をこすつた。



# 第1章 魔眼の少年



——へんな夢見たなあ……。

ツカサ・ストロビラントウスは、目をこすりながら起きあがった。夢の内容を正確に覚えているわけではないが、せつない気持ちが残っていて、泣きたい気分になる。ここ毎朝、いつもこうだ。

——なんか目が痒かつた気がするけど、今はもう平氣だな……。  
ベッドに手をついて上半身を起こしたとき、ふにつと熱くてやわらかいモノを押してしまった。それが女性の乳房だとわかるまで、一瞬の間があつた。

「せ、せせせ、先生っ」

パジャマ姿のツカサの横に、ブラジャーとスキャンティ姿の女性が添い寝をしている。胸はふんわりと盛りあがり、ウエストは蜂はちのようにくびれ、ハート形に広がったヒップが続いている。プロポーションに恵まれた綺麗な身体だ。

長いまつげが造作の整った顔に影を落とし、妙に子供っぽい寝顔になつてている。

シルヴィア・ヴエスパー。ツカサの身元引受人になつてゐる魔術の先生だ。隣室に住んでゐるのだが、寝ぼけてまた部屋を間違えたらしい。この学院に来てからちょうど一週間だが、毎朝かかさず、こんな状態が続いている。

「シルヴィア先生！ 起きてくださいっ！」

肩をゆさぶるのだが、先生はなかなか目覚めてくれない。



それどころか彼女はにまにまと笑いながらツカサを抱き締め、巻きこむようにして寝転がつた。重い太腿ふとももをツカサの腰の上に乗せる念の入れようだ。

胸の谷間に顔が埋うずまり、太腿のむにむにが腰を押さえる。甘い体臭に加えてツンとくる酒の匂においが、シルヴィアが昨夜なにをしたかを伝えてきた。

「むー、むむつ、せ、先生っ。飲み過ぎですっ!! 起きてくださいっ」

先生はどんな夢を見ているのか、ツカサの股間を撫なででさすつてきた。ツカサはペニツクに陥おちつた。健康な少年なのでペニスは当然朝勃ちしている。それをシルヴィアは容赦なくつかんできたのだ。

「ふふつ。だいじょうぶ、痛いのは最初だけよ……むにや……」

「先生、せんせいっ！ やめ……つ、やめてっ！」

女の人の熱い肌の感触と甘い体臭につつまれ体重をかけられるのだから、健全な青少年には拷問こうもんに近い。

——僕の貞操ていそう、先生に奪われるのかなあ……。

あきらめに近い感情に襲われながらも、先生の腕の中でモガモガともがいていたとき、突然彼女の冷静な声が響いた。

「ちょっとツカサ。なにやつてんのよ」

ドガツと音がして、衝撃とともにベッドから転がり落ちる。

「ぐぎやつ!!」

周囲の景色がぐるぐると回転し、背中や腰に衝撃が走る。

「いててて……腰、打つた……」

壁に当たって回転が止まつたツカサは、よろよろと立ちあがり、震える手でメガネをかけた。女の子に間違われることも多い整つた童顔が、メガネのせいでとぼけたものに変化する。

ようやくのことでの覚醒したシルヴィアがツカサをベッドから蹴り出したのである。

「おはよ、ツカサ。お師匠様じょうさまに対してふらちな行為に及ぼうとした罰よ」

紫水晶アメシストのような綺麗な瞳が、強い光をたたえてきらめきながらツカサを見据えている。

「お、おはようございます。先にしかけてきたのは先生なんですけど」

先生は小首をかしげた。

「あらそう？ 覚えてない」

「お酒、飲み過ぎじゃないんですか？ とにかく僕のベッドで寝るのは勘弁かんべんしてください。

毎日毎日こんな調子じや、僕の体がもちません」

「やーねー、この子は。そんなテント張つたまま怒つても、みつともないだけよ？ あつ

はつはー。よかつたわ、今日も元気そうで。それじや、朝食の準備よろしく！」

シルヴィアは豪快に笑うと、元気よく隣室へと戻つていった。お酒のせいで甘つたるく

変化した体臭が、部屋にまだ残っている。

「はあ……」

ツカサは大きなため息をついた。

シルヴィア先生はツカサの師匠で、すばらしい魔力をもつた魔法使いだ。美人で姉御肌あねこはだで、生徒たちにも慕われている。

だが、シルヴィアには、重大な欠陥けつかんがいくつもあった。



「お酒ちょうだい」

「ダメです！ なに言つてるんですか!? 朝ですよっ」

ツカサはハーブサラダの皿を並べながら、断固とした口調で言つた。

「ケチ」

ハチミツトーストをかじつているシルヴィアが返す。

——高位の魔術師つてみんなこう、ズボラで生活能力がないのかなあ？  
シルヴィアは、家事一切いっさいがダメなうえに、酒好きで口が悪い。しかもエッチで怠惰たいだいとき  
ている。